

# 飯島賢二の『恐縮ですが...一言コラム』

## 第 342 回 家族、それは「宝玉の絆」

2009.12.13

12月5日、内閣府が発表した世論調査によると、「結婚は個人の自由だから結婚してもしなくてもどちらでもいい」と答える人が70%にのぼることが分かった。また、「結婚しても必ずしも子供を持つ必要がない」との問いには42.8%が賛成と答え、平成4年の調査開始以来、過去最高となった。何となく見過ごしているニュースと思ったら、とんでもない。下手すると、このままでは、日本は「国家」を形成できなくなる危険性すら感じる、衝撃的データである。

これは、親・学校を通じた現代日本の教育の結果であり、家族・人類を維持していくためにはどういうことが必要なのか、家族の愛情はどれほど重要なものなのか、という「価値観」について日本は教育できていないということの、何よりの証(あかし)である。

人間の親子関係は特別なものがある。

以前このコラムにも書いたが、人間の赤ちゃんは、自分ひとりでは歩けず食べることもできない、非常に未熟な状態で産まれてくる。この現象をスイスの動物学者A・ポルトマン(Adolf Portmann)は、人間の出産は、本来の出産時期よりも早く産まれているという意味で『生理的早産』と呼んだ。生理的早産によって産まれる新生児は『子宮外胎児』と呼ばれるほど未熟であり、最低限の感覚(運動機能)を獲得するまでにどんなに短くても1年間にかかる、つまり1年早く生まれてしまった「1年間早産説」である。ひょっとすると人間の赤ちゃんは、他の生き物、動物の中で一番未熟であるということかもしれない。

放っておいたら生きることの出来ない、そんな特別な赤ちゃんを、お母さんは片時も離さず、辛抱や我慢以上の溢れんばかりの愛情を込め、強く元気に生きよ...と願いながら育て上げる。お父さんも家族も、みなでお母さんを助け、貧しいけれど心豊かな家庭を築いていた。正に「**宝玉(ほうぎょく)の絆(きずな)**」で結ばれていたのが「家族」である。自分ひとりだけでは生きていけない...そんな弱さを共有し合い、手を取り合って一緒に生きていく支えが「家族」である。この家族の存在こそ実に人間的であり、本能のみで生きる他の動物・種族とは違う、大きな財産だと思っていた。

「結婚は個人の自由だから結婚してもしなくてもいい」と答える人、自分ひとりでは一体何が出来るのだろうか? 心も体も冷え切った夜、耐え抜けるほどの強靭さは、余程でない限り持てないのが人間の「弱さの真実」であろう。自ら体験せずして種の保存と繁栄を拒絶する輩が増えていくことが、どんな結果を招くことか。結婚はしない、結婚しても子供はつくらないとすれば、人口減少に拍車がかかる。当然社会システムは大きく変わり、経済の成長どころか維持すら困難になり、財政を支える根底も崩壊する。日本が国家を形成できなくなるような、最悪の事態を彷彿(ほうふつ)される今回の調査データ。日本人の結婚観の変化を単なる「価値観の多様化・個性化」で片付けることなく、国家的危機という認識を持つべきと言いたい。もっと本質的な問題を見極め、少し時間をかけても、国民的論議を巻き起こし、長期的に解決に向けたダイナミックな政策を模索すること、今の日本人にとっての**最重要レベルのミッション**であると思っている。